

園のおたより



第 7 号

令和 7 年 1 1 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

先生、髪の毛切ったね

園長 関 由起子

日々の登園時、本園の先生方がこどもたちに対し、「〇〇さん、髪の毛を切ったね」と声をかけている光景をよく目にします。まだ帽子を脱ぐ前のわずかな隙間から、こどもの些細な変化を見抜くその洞察力には、いつも深く驚かされます。

先月、私自身が髪を切りました。すると、驚いたことに多くのこどもたちが「園長先生、髪を切ったね」と、口々に声をかけてくれたのです。家族ですら気づかない、あるいは関心を示さないような変化を、こどもたちはすぐに察知し、素直に言葉にしてくれました。こどもたちはすばらしい好奇心を持って私を見ていて、些細な変化にも気づくことができるのだと改めて感心しました。

また、本園の先生方の、こどもを見る力に関する印象的なエピソードがありました。A先生が、Bさんを保健室に連れてきた際、「いつものほっぺの『ツヤ』がない。肌の質感がいつもと違う」と養護教諭に伝えました。私自身は「乾燥による肌荒れか」「発疹か」といった、知識や過去の経験をフィルターとしてこどもを見てしまいました。しかし、A先生はそうした既成の知識に頼る前に、まず「Bさんのいつもの健康な状態」を基準として、「いつもと違う」という本質的な異変を捉えていたのです。私たちの身の回りには、「見ようとしなければ見えないこと」が数多く存在します。こどもの体調や、情緒のわずかな変化にいち早く気づけるのは、先生方が日頃から、こども一人ひとりの「いつもの元気な姿」を、愛情と責任感を持って懸命に見つめている証拠だからではないかと思いました。

ちなみに、私の髪を切ったことへの家族の反応は、切ってから三日後の娘からの軽い問いかけと、夫からの無反応という結果に終わりました。家族のような気を許した間柄では、その見る力が緩むのでしょうか。あるいは、対象への関心の度合いが低いからなのでしょう。そもそも私自身髪を切ったことに、園児に言われるまで忘れていましたので、私すら私自身への関心が薄れていたのかもしれませんが。こどもたちのきらめく「まなざし」と、先生たちの温かく鋭い観察力に負けないよう、日々の小さな変化を大切にする力、感じ取る力を磨いていきたいと思いました。



「友達」とは何でしょうか（5月号の続き）

副園長 小谷 宜路

5月号でも少しご紹介しましたが、今年度は、「友達」とは何かという問いをもって、園内での研究活動を行っています。今月半ばには、地域の幼稚園、保育園、こども園の先生方などに参加いただく「公開保育研究会」の今年度第2回目も開催しました。参加いただいた先生方とのやりとりや、大学教育学部の先生からのお話などから、改めて、幼児期の「友達」の意味を捉え直すことを進めています。研究の中心は、保育中のこどもたちの様子を書き留める中で、捉えられそうなことを整理していくことですが、2学期には、どうもうまく「友達」にならない（そう、大人には映っているだけかも知れませんが）場面も大切に書き留めたり、そこでの意味を考えたりしています。

かつてのある年の1組での姿です。入園してひと月ほど経った日、お弁当の準備が始まる時のことです。4月から新たに同じクラスで過ごすようになり、早くも気になる相手が出てくる人もちらほらおりました。この日、AちゃんはBちゃんの隣に、BちゃんはCちゃんの隣に、CちゃんはAちゃんの隣に座りたいと言います。将来、幼児教育の職を目指して学んでいる大学生に授業をする中で、この場面を例にして、皆さんだったらどうしますかと問いかけることがあります。いろいろな方法が出てきます。「丸いテーブルに座ってみる」丸いテーブルがあればよいのですが、この園のテーブル面は長方形です…。「向かい合わせに座り、もう一人がその間の横面に座る」こどもたちにとって隣は隣り合うのが隣であって、斜めは隣にならないようです…。「今日は、AちゃんとBちゃんが隣に座って、明日はCちゃんとローテーションのように提案してみる」こどもたちは、今、今日このときに隣になりたいのです…。「先生の隣に座れるようにする」もちろん先生の隣も嬉しいかも知れませんが、ようやく気になる人が出てきて、その人の近くを大切にしたいと願っているのだと思います…。

私が出会った実際の場面では、しばらく無言が続き、ふとBちゃんが、向かい合うように自分の椅子を動かし、Aちゃん、Cちゃんも、その様子に何かを感じている様子でしたが、何事もなかったかのように食事の準備に移りました。この場面と似たことは、園生活で無数に起こっているでしょう。どうしたらよいか、何か一つの正解があるわけではありません。大人の橋渡しが必要なこともありますし、大人が躍起にならずとも、こども同士の「友達」としてのつながり方を尊重することで、関係が生まれたり変化したりすることもあります。「友達」とは何でしょうか…、引き続き深めていきたいと思っています。



クラスだより



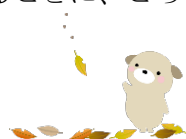
1 くみ

「うれしいがいっぱいの秋」

保育室から園庭を見ると、日に日にコブシやカリンの葉の色が変わっていく様子を目にします。真っ赤に染まったハナミズキの葉は今、土の絨毯のようになっています。こどもたちは、「あの葉っぱはオレンジだね」「カリカリの葉っぱが落ちているね」と感じるようです。葉の色が深まる秋から、寒い冬へと変わっています。

先日、プランターにチューリップの球根を植えました。今は土の布団の中でゆっくり眠って、あたたかな春に、1組にいる全員が4歳になったら咲くことを話しました。何色の花が咲くだろうか、赤がいいな、青がいいなとわくわくしている姿がありました。それから『チューリップ』の歌を歌って、水をあげました。ところが、その翌日「あれ？まだ咲かないね。随分経ったのにねえ」と呟いた人の言葉から「ほんとだねえ。まだ咲かないねえ」と土をじいっと見つめる人たちがいました。こどもの一日の重みや大切さをしみじみと感じました。どんな人にとっても一日は同じだけの「時計の時間」がありますが、どのように過ごすかで「心の時間」の感じ方は変わっていくのですね。きっとこどもたちは、満たされた一日を暮らしているのだろうと思いました。

落ち葉いっぱいの園庭は、毎日いろいろな色や音があります。「ガガガ」と声を鳴らして働く車になって動く音、落ち葉を集めて別府温泉に浸かる音や焼き芋を焼く音、ドングリを転がす音…そして、友達と一緒に笑う声がします。新しい友達との関わりも見られ、その友達の魅力に気付いて嬉しくて思わず大きな笑い声が出てくることがよくあります。友達が「わたし」の声を受け取ってくれることが嬉しくて、その友達の方に思わず思い切り駆け出すこともあります。一緒にいることが嬉しくて歩きながらニコリとする姿もあります。嬉しいがいっぱいになると、それが溢れてくるのでしょうか。素敵な姿を近くで見られることに、こちらもちっぴりの嬉しいをもらっています。





2くみ

「一緒に考えて、もっと面白い」

秋晴れが心地よい季節です。園庭でも室内でも、こどもたちは何人かで集まり、同じようなイメージや遊び方に興味を寄せながら楽しむ姿が見られました。室内の「おばけ屋敷」や「猫ちゃんの家」、戸外の「カマキリハウス」など、場を共有して遊ぶ中では、思いやイメージの食い違いから葛藤する場面も少なくありません。

運動会での3組が考えた遊びをきっかけに、Aさんは自分でもコースを作ってみることにしました。チームの名前やコースの中でのイメージを細かに考えてきて、形にしてみることにしました。コースを作るために必要な「電車」に色を塗ったり、3組から運動会で使った「木」を借りてきたりして、黙々と取り組む姿がありました。遊びに興味をもって関わろうとする人も多かったです。「レバーがないよ」「こっちの色の方がいいんじゃない？」など新しいアイデアを出す人もいました。Aさんはあくまでも自分のイメージをありのままに形にしようと必死でした。

ある時、Aさんの近くでBさんがダンボールを使って「自動販売機」を作っていました。Bさんは作りながらAさんたちの会話を聞いていたようです。「(コースの)最後に自動販売機でジュースをもらいます」とBさんは話しました。Aさんは最初「えっ」と言いました。考えていたコースとは大きく形が変わる戸惑いがありました。しかし、Bさんの作っていた「自動販売機」を見て、その魅力を感じたようです。Aさんも一緒になって自動販売機を作り、Bさんがコース作りに加わり、いつの間にかゴールでは自動販売機でジュースをもらうことになりました。

自分のものとは違うアイデアでも、面白さを感じて受け取ったり、一緒になってやってみたりすることで、新たな楽しさにつながった姿でした。この他にもいろいろな場面で相手のことを考えたり、相手の思いを感じ取ったりしながら、一緒に心地よく過ごしているこどもたちです。





3 くみ

「大変の先にあるおいしさ」



苗植え、水やり、草むしりなど1学期からみんなで育ててきたサツマイモをようやく収穫しました。「うんとこしょ、どっこいしょ」と掛け声をかけ、わくわくしながら思いっきりツルを引っ張ってみるとそこには小さなイモが少ししかありません。「これだけ?」といった様子の方々とさらに掘ってみました。乾燥した畝を見て、固い土を自分の手で掘り進めることができるのかという不安や手を汚したくないという気持ちになる人もいました。それでも、「サツマイモを収穫したい」という思いが勝り、意を決して掘り進めるとまだまだたくさんのイモが埋まっていました。そこからは、小さな根を見つけると「サツマイモかもしれない」と汚れることなどお構いなしに一心不乱に掘り進めていきます。根っこしか出てこなくても「お芋なかったね」と友達と笑い合う人、大変そうな人がいれば「一緒に掘ってあげる」と力を貸してくれる人、誰も手をつけていないところを見つけて黙々と掘り進める人など、それぞれの楽しさを感じながら242個のサツマイモを収穫できました。最後には、アクで手が汚れてしまいましたが、それすらも「真っ黒だ」と誇らしげな様子でした。

収穫を終え、まずは3組のみんなでふかし芋にして食べました。以前、包丁を使ったことを思い出しながら固いイモも自分たちで切って準備を進めます。切るとイモの中から何やら白い液体が出てきました。「ボンドが出てきた」と困惑する子どもたち。食べることを楽しみにしていたのに、「このまま食べられるのか」と不安な気持ちが大きくなっていきます。「洗ったらきっと大丈夫だよ」と言ってくれた友達の言葉を信じ、切ったサツマイモは水にさらして、ふかしてみました。室内でふかしていくと、少しずつおいしい匂いが部屋の中いっぱいになり、先程までの不安はなくなっていました。出来上がりを食べると、お芋の優しい甘さに「おいしいね」と幸せそうな様子でした。

サツマイモを育てる過程には、土で汚れること、水やりや草取りをすること、力いっぱい掘ったり引っ張ったりすること、など大変だから普段は避けてしまうようなこともありました。その気持ちを越えて、やってみたらこそ知れた大変さや楽しさ、おいしさがありました。